

(日置郡吹上町中原団地)

位置と環境

遺跡は、吹上浜砂丘の内側約2km、中原集落の標高42mの低台地で、国道270号線の田尻バス停一帯にある。昭和51年に調査された辻堂原遺跡が同台地の東側約500mの地点にあり、この一帯に古墳時代の大集落があったことが推定されている。

調査の経緯

昭和43年に270号線の道路の付けかえ工事中、吹上高校社会研究部の生徒によって道路断面に竪穴十数基とその中から炭化米6ℓが発見されてことが端緒である。

調査は、河口貞徳が昭和43年8月、第1次調査として道路の西側(第1地点)、同年12月と昭和45年3月には東側(第2地点)を第2次・第3次調査として行った。地主の池畑国男と子息の耕一の協力に得るところが大きい。

遺構と遺物

第1次調査では、竪穴住居跡1号・2号と溝状遺構を検出し、多量の成川式土器と土師器、砥石等を発見している。2号住居跡からは折れた木柄のはまり込んだ鍛造の鉄斧が出土して注目された。

第2次・3次の道路東側の調査においても竪穴住居跡3号と溝状遺構、ピット等を確認している。

成川式土器については、壺形、甕形それぞれ2分類して「花熟里I類」「花熟里II類」とした。甕I類は頸部でくの字状にやや内湾しているもの、II類



第1図 花熟里遺跡の位置

は同様の器形に絡縄凸帯が付くものである。I類がII類より下位に多く出土することから古いとしている。第2図は、第2地点第3次調査の溝内出土の遺物である。1・3・4・7がI類5・8がII類にあたる。

昭和51年の辻堂原遺跡の調査では、甕形土器を2分類したが、花熟里のI類・II類の甕はいずれもその中の第I類の範中に入るもので、須恵器を伴わない。その上限は4世紀に逆のぼる古いタイプとしている。

特徴

調査地は、辻堂原遺跡を中心とする古墳時代の大きな集落の一部にあたるものと思われる。土器型式が成川式土器の中の古期の辻堂原第1類の時期に限られており、比較的限定しやすく、集落形成にかかわる好資料となるものと思われる。

資料の所在

出土遺物の一部は、河口貞徳宅、ほかは出口浩宅に保管されている。

参考文献

河口貞徳・出口浩1971「第1次花熟里遺跡調査報告」『鹿児島考古』第5号

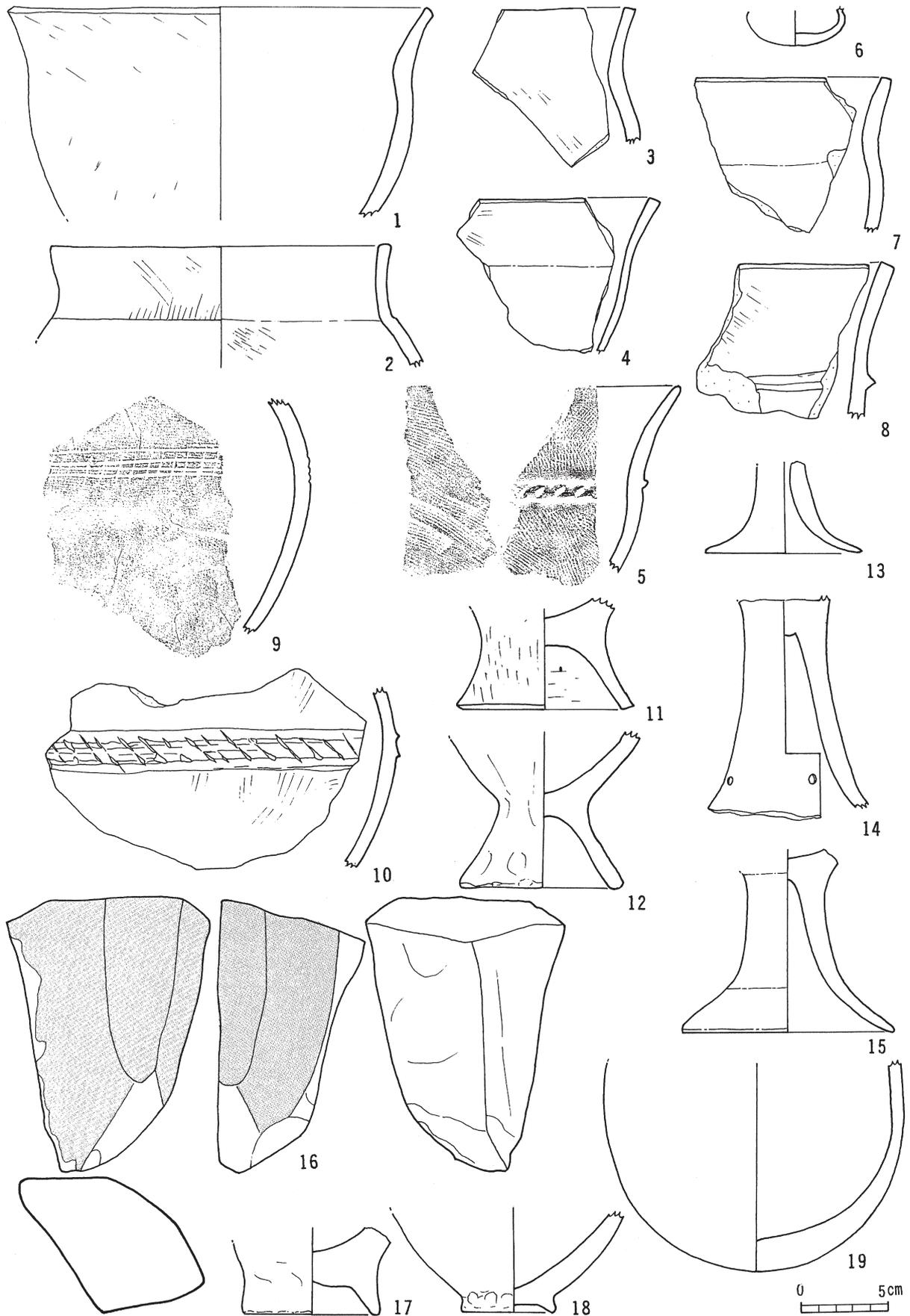
出口浩・池畑耕一1972「第3次花熟里遺跡調査概報」『鹿児島考古』第6号

上村俊雄・出口浩1973「第2次花熟里遺跡発掘調査報告」『鹿児島考古』第7号

(出口 浩)



写真1 国道両側の畑一帯(北から)



第2図 出土遺物 第2地点溝内出土の成川式土器ほか